

KTK ひゅうまん 京都

No. 544 2022年3月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者／池添 素 電話&FAX(075)465-4310 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

- P 1 左大文字 つどめ
- P 2 常任委員会から 池添 素
- P 3 障害のある人の暮らし 沖田友子
- P 4 血の染みついたバトン 中村 暁
- P 5 人生の伴奏者 井上吉郎
- P 6 ジョニーの炸裂日記 ライスチョウジョナ
- P 7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P 8 2+2=詩 富士一文
- P 9 障害のある人の権利を守る北陣連から 濱中 博
- P 10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P 11 知っ得情報 松本 美津男
- P 12 2020年からのコロナ禍に学んだこと 大西里江

左大文字

ロシア軍は無条件に即時撤退せよ!

時間軸を巻き戻したような信じられない惨状に言葉を失っている▲主権と領土を土足で踏みじり、核をちらつかせながらの史上最悪の侵略戦争だ。ロシア軍は、住宅、学校、病院などの民生施設も、子どもや女性、高齢者をも残酷な武力の標的として非道の限りを尽くしている。爆撃を避け逃げまどう人、手作りの武器を携えロシア軍に立ち向かおうとする人、ウクライナの必死に防戦する人々の危機に胸が痛む▲2月24日の未明、冬季オリンピックが2月20日に終焉し、3月4日からはパラリンピックが開幕しようとしているその間隙を縫っての非情だ。そのパラリンピックは、第2次世界大戦で損傷した兵士たちの、リハビリの一環として行われたアーチェリー大会を起源とする▲1948年にロンドン郊外の病院内で開かれた大会だが、回を重ね、1952年に国際大会になった。1960年のローマ大会からはオリンピック開催国で、1964年の東京ではパラリンピックが愛称として使用された▲旧ソ連時代のモスクワオリンピック(1980年)は、前年12月のソ連のアフガン侵攻によって平和の祭典がボロボロになった。スポーツと平和に対するリスベクトの欠片もないような国家指導者群のいる国、いまのロシアに連なる▲モスクワの翌年、1981年は国連が定めた国際障害者年。多数の障害者が戦争や他の形の暴力の犠牲者である、ことも記された。

つどめ



「桃の節句」
渡辺あふる

常任委員会から

〈戦争はやめて〉

ウクライナ全土へのロシア軍の武力侵略が始まり、テレビのニュースでは、死者の数が伝えられ、隣国へ避難する人たちの様子が映される毎日。人間一般が愚かなのではなく、プーチンが愚かなのだと思いたいが、それでもいくつもの理由を掲げて、ウクライナの市民を攻撃することの正当性を世界にアピールする傲慢さがまかり通る。ヤツのもくろみが破綻するときまでウクライナ市民は命をかけたければいけないのか、そんなはずはないと日本で叫んでいるが。一日でも一時間でも一分でも一秒でも早くロシア軍はウクライナからの撤退を、世界中の人が願っている、それはロシアでも。京都で声を上げるのとは

くさんの人が逮捕されている様子。子が少し前まで報道されていたが、今は報道規制が引かれていたのだろう、眼にすることはなくなつた。しかし、世界の声は国連ではもちろん、難民の受け入れも各国が表明し、日本もその動きに追従。「今まで動かなかつたのに」という声も聞こえてくる。ウクライナ市民の安全と平和が戻りますように。戦争は絶対反対。

〈時計と小判〉

ネットに流れた「京都市子ども若者はぐくみ局の局長逮捕」の報道にはびっくりしました。左京にある保育園の園長から高級時計をもらい、監査で保育士不足や土曜日に保育園を閉めることを容認する手心を加えたこと。社保協子ども部会で、すぐに京都市役所前の抗議宣伝

と真相究明を申し入れる行動を。なんと京都市長は、内部調査委員会を作りそこで詳細を調査すると。仲間うちで事件の糾明など考えられない。第三者委員会の設置を求めて市役所前集会を企画していたら、またまたネットニュースが。今度は園長から小判をもらったとのこと。「もう時代劇か！」のツツコミも笑い話にならないくらい市民をバカにした事件。監査に手心を加えるなど、一人のできることはではないとすれば、組織ぐるみの犯罪なのではとか、リハビリセンターと児童福祉センターなどを合築する意味のない無駄遣いも、局長のもくろみで裏があるのではと次々疑惑の予想が止まりません。京都市をホテルだらけにした現市長のおろかな仕事もこの事件の延長にあるのではないかと勘繰ります。京都市民は黙っていない。

京都の保育は民間保育園がほとんどを占めています。その保育園の運営費の補助金を大幅に削減する方針を出し、3月初め削減額が明らかにになり、園長はじめ関係者の怒りが爆発。3月6日に開催した「子どもと保育にかかわるお金の話緊急学習会」では、報告してくれた保育園では約4000万の減額。経験年数11年で給料を頭打ちにし、常勤と非常勤の割合を決めた補助金の額は、ベテランが多く、常勤で保育士を雇用している質の高い保育園が減額され、新採や経験年数の若い保育士を雇い、非常勤をたくさんにして人件費が低い保育園の補助金が増える仕組み。保育の質の低下が起ること

障害のある人の暮らし

誰とどこに住むか選択できる権利を！

沖田友子

「グループホームで陽性者が出たので、今日から閉鎖します。迎えに来てください」。コロナが身近になった瞬間だった。今晩から自宅に帰ってくる、夕食はどうする、何時に迎えに行ける？明日の朝は何時に迎えに来てもらえる？いくつもの「？」が押し寄せてくる。こういう時は冷静に。まずヘルパーさんへ連絡を行い、仕事の段取りをして、日中の事業所に迎えに行くことができた。いつまで閉所になるか不明とのこと、日常は大きく変わらざるを得なかった。

週末の段取りも済ませた3日後の深夜、息子が嘔吐し始めた。苦しそつに身体を起こし大量に戻すので5年前の逆流性食道炎が頭をよぎった。かかりつけ医に連絡し受診。まだ、車椅子までハイハイしてくれる力があつたので助かった。微熱があり、ガスがたまっているが、胸の音はきれい。念のためPCR検査をするので、自宅に戻って様子をみるようにとのこと。おさまったかに見えていたが、自宅に戻ると、嘔吐は朝まで続いた。再度病院へ電話し、抗いれん剤が飲めていないこと、自宅で抗原検査をしたところ陽性と出たことを伝えた。私が付き添うので何とか入院できないだろうかと相談したところ、PCR検査の結果が陽性と判明したので、救急車を呼んできてください。すでに入院調整できている旨を伝えるようにとのことだった。ほどなく防護服の救急隊員

に運ばれコロナ専用入口から、レッドゾーンに隔離された。ぐったりした息子には昨年秋に承認された新薬の点滴が始まった。丸一日があつたという間に過ぎ、38℃まで上がった熱も下がり始めた頃、今度は私が発熱、感染したのだ。病棟で知ったことは、着ていた服、タオルはすべて袋に入れて口を閉じる、食事は使い捨て容器で、食べたら袋に入れて口を閉じる、「カップ、お箸も使い捨てだ。外部から差し入れはできず、ネット注文するとのこと。スマホが使えただで心丈夫だった。髭剃りやボカリを注文した。看護師を呼んでも防備されてからなので、少し時間がかかる。

操作もできるようになり、眼を放すとベッドが高くなってびくびくすることもあった。医師や看護師は必ず「困ったことはありませんか？」と声をかけてくださった。「コロナは社会から遮断されるが、入院できたことで本当に支えられて生きていることを実感した。ベッドとトイレの往復だけの移動だったが「穏やかに過ごされていて良かったです」と看護師から声をかけてもらうほど落ち着いて過ごすことができた。手厚い看護のおかげと感謝している。

軽症で帰ることができたが、私は疲れやすいと感じており、日にち薬で体力が戻れば大丈夫なのか、「後遺症」という言葉が頭をよぎって不安になることがある。

息子も2週間ぶりにホームに戻ることができたが、週末は一日の半分はぐっすり眠っている。同じように疲れやすくなってしまうのだらうかと心配は戻きない。

血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

⑮ 「疑惑」

る。

新型コロナウイルス感染症 さて、陽性と診断されると、

「第6波」はピークアウトと 保健所と京都府入院コント

言われるが本当だろうか。確 ールセンターが調整し、「入

かに「直近1週間と先週1週 院」か「自宅療養あるいは施

間の比較（7日間平均）」でい 設療養」かが決められる。重

えば「1」を毎日割り込んで 症化リスクの高い人は入院が

いるから減少傾向なのだろ 原則である。特に高齢者につ

う。しかし入院率は未だ高い いては「高齢は独立した重症

水準。療養中の患者数も1万 化リスク因子」ⁱであり、当

人を割らない。だが京都府が 然に入院が必要である。だが

毎日発表する数字が、本当の 病床逼迫で高齢者であつても

意味で当日の新規陽性者数と 入院できない人は多数発生し

は限らない。保健所もひっ迫 ている。そんな中、驚くべき

しており、大量に届けられる 話を聞いた。この間、高齢者

発生届にすべて当日中に対応 施設に入所している方はまず

できない。そして何より、京 入院させてもらえておらず、

都府における診療・検査体制 亡くなった人もいる。現場で

が一日につき最大何人の方を は「高齢者施設に入所してい

検査・診断できるか、そのキ ー人は「入院させない」と

ヤパシテイが不明だからであ いう「トリアージ」が府によ

つてなされているのではない 気に膨張させる危険性を指摘す

かと「疑惑」を抱いていると る声は早くからあった。事実と

いうのである。そして実際に して、人工呼吸器やECMOと

「保健所を通じて入院を依頼 いった有限の医療資源を効率的

したところ入院医療コント ールセンターから『延命治療

を望むのか』といった意味の 意見を存在するⁱⁱ。府への「疑

う証言が複数ある。もし事実 惑」が杞憂であつてくれること

ならとんでもない話である。 を願うばかりだが、それではな

大体、コロナの治療は「延 ぜ施設入所者が入院できないの

命」ではなく「回復」のため かにについて、府には説明する責

の治療である。にもかかわら 任がある。

ず、府は施設にいる高齢者は

体が弱って認知症だから、コ

ロナの治療を受けること自体

が「延命」なのだから、入院

させず施設で看取れなどと考

えているのだろうか。まさか、

もちろん信じたくないが、

あり得ないこととは言えな

い。 コロナ禍が日本に熾り続け

ⁱ 「新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き」 第6.2版 14ページして

ⁱⁱ 『「反延命」主義の時代 安楽死・透析中止・トリアージ』（編著・小松義彦、市野川容孝、堀江正宗、現代書館・刊）を参照

人生の伴走者

③ 京都の京都たるゆえん

本紙編集長 井上吉郎

・町家

京都の町家の特徴といえば、「格子」でしょうか。京町家ではその「格子」の豊かさが、リズムとなって京都ならではの町並みをつくってきました。「格子」は町家だけでなく、街並みを創りました。

新しく建った家にも、黒色の「格子」がありました。街並みを壊さない配慮でしょう。

京町家の特徴として第一にあげられるのは、格子はその形によつてその店の職業を表現していたということ。通りご

とにはいけません。今の私達の生活にあつた「格子」のように思います。建物のデザイン規制や高さ制限も大事ですが、この建物は、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）教授であつた日本のモダニズム建築をリードした建築家・本野精吾（1882年〜1944）の自邸として、本野によつて設計され1924年に竣工したものは京都市による「京都を彩る建物や庭園」に認定されるなど、近年その文化財的評価が高まっています。小野竹喬（ちつきょう）、山口華楊、堂本印象ら、京都・衣

代には、なにかひとつのルールをつくることによつて町並みが連続させることができます。今の京都では、建物の素材もまちまちですから、町家と同じよ

うにはいけません。今の私達の生活にあつた「格子」のように

思います。建物のデザイン規制や高さ制限も大事ですが、この建物は、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）教授であつた日本のモダニズム建築

をリードした建築家・本野精吾（1882年〜1944）の自邸として、本野によつて設計され1924年に竣工したものは京都市による「京都を彩る建物や庭園」に認定されるなど、近年その文化財的評価が高まっています。小野竹喬（ちつきょう）、山口華楊、堂本印象ら、京都・衣

代には、なにかひとつのルールをつくることによつて町並みが連続させることができます。今の京都では、建物の素材もまちまちですから、町家と同じよ

うにはいけません。今の私達の生活にあつた「格子」のように

思います。建物のデザイン規制や高さ制限も大事ですが、この建物は、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）教授であつた日本のモダニズム建築をリードした建築家・本野精吾（1882年〜1944）の自邸として、本野によつて設計され1924年に竣工したものは京都市による「京都を彩る建物や庭園」に認定されるなど、近年その文化財的評価が高まっています。小野竹喬（ちつきょう）、山口華楊、堂本印象ら、京都・衣

代には、なにかひとつのルールをつくることによつて町並みが連続させることができます。今の京都では、建物の素材もまちまちですから、町家と同じよ

にしたその外観意匠は、近代建築史上最初期のもので。内部は、居間と食堂が1室となった主室をはじめ、生活動線をコンパクトにした間取りになっています。合理性を追求し、間取りや意匠を通じてモダニズムの思想と表現を追求した先進的な住宅建築と言えようか？

2007年にはモダニズム建築の保存に関する国際組織 DOCOMO Japan より日本を代表

するモダニズム建築100選の1つとして選定され、2016年には京都市による「京都を彩る建物や庭園」に認定されるなど、近年その文化財的評価が高まっています。小野竹喬（ちつきょう）、山口華楊、堂本印象ら、京都・衣

代には、なにかひとつのルールをつくることによつて町並みが連続させることができます。今の京都では、建物の素材もまちまちですから、町家と同じよ

うにはいけません。今の私達の生活にあつた「格子」のように

思います。建物のデザイン規制や高さ制限も大事ですが、この建物は、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）教授であつた日本のモダニズム建築をリードした建築家・本野精吾（1882年〜1944）の自邸として、本野によつて設計され1924年に竣工したものは京都市による「京都を彩る建物や庭園」に認定されるなど、近年その文化財的評価が高まっています。小野竹喬（ちつきょう）、山口華楊、堂本印象ら、京都・衣



ジョニーの炸裂日記3

ライスチヨウジョナ(イラストレーター)

趣味が映画鑑賞である私は、人並み以上に映画を観ているという自負がある。以前は週一で映画館へ通い詰めていて、スタッフに顔を覚えられてしまうほどだった。ちなみに映画館へ行くなら市内のT.O.H.Oシネマズ二条がおススメ。私は人工呼吸器ユーザーでもあるのだが、この映画館は映画鑑賞中に人工呼吸器の充電が可能。スタッフに伝えると、見たこともないぐらい長い延長コードを持ってきてくれる。長すぎて逆にドン引きしてしまった記憶がある。それに車椅子用トイレがめちゃくちゃ広い。こちらも広すぎて面食らったぐらい。ついでに備付けの折り畳みベッドもしっかり設置しており、これもものすごくデカイ。デカすぎて横になくてそのまま寝てしまいそうなく

らいである。とにかく、他の映画館に比べ対応がかなり柔軟だという話なのだが、コロナ禍の今、映画館なんて全く行けていない。昨年の12月、コロナがだいぶ落ち着いていた頃、2年ぶりに映画館へ行き「やっぱ映画を観るなら映画館じゃないかね」と思った矢先に第6波が来てしまい、再び行けなくなってしまった。映画館に行けないなら家で観ればいいじゃない？いやいや、テレビやパソコンの小さい画面で観る映画なんて…。

本業である漫画を描いていない。厳密に言うと、仕事として依頼された漫画は描いているが、自分の創作としての漫画を描けていない。コロナ禍の中、2年以上まともにも外も出ず、人とも会わないような自粛生活を送っていると、インスピレーションを得られるような刺激が全く無く、漫画のアイデアが全く思い浮かばなくなってしまったのである。これは私だけの問題ではなく、聞いてみるとどうやら世の中のあらゆるアーティストが同じような状態になっっているらしく、アイディアの枯渇が激しいそうだ。まったく困ったものである。最近になってやっと描きたいものが思い浮かんだのだが、肝心のストーリーがどうしてもまとまらない。そんな中、先ほど書いたように家で映画をずっと観ているのだが、なんとこの行動が功を奏した。映画を大量に観てひたすらインプットを繰り返していると、それが刺激と

なり、考えていた漫画のストーリーが頭の中で徐々にまとまりだし、自分が何を描きたいのかがはっきりしてきた。下手したら映画ばかり観て自堕落な生活を送っていると思われそうだったが、これがしっかり創作の役に立ったことで一安心である。以前、同じく映画好きの弟が「自分が映画好きなのは、映画を通して色々な国や場所に行った気分になれるから」とか何とか言っていて、それを聞いた時は「何をクサイこと言うてんねん」と思ったのだが、刺激を得るという意味では案外それは間違いではなかったのかもしれない。

というか、本当はこういうことが書きたかったわけではなく本題は別にあつたのだが、それは次回に持ち越すことにして、とりあえず今日はこの辺で。

話は変わるが、私は約半年間、

*

話は変わるが、私は約半年間、

つれづれあらぐさ

あらぐさ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

場面② 「あの時の大人が

そう言ったんやで」
と言われる

自分ではそれほど感じないのですが、うちの声は少し独特のようです。学生の頃は返事をするとき二度見され、就職した時は利用者さんに「中山さん、声変わってるね」と言われました。話し方や声の高さなのかと思っていました。ある人の「あなたの声はすぐ分かる」「高さでなくて声質」の分析に合点がきました。コロナ禍前はライブやスタジアムで叫んで声がかれてしまい、利用者さんから「声、どこ行ったん?」「はよ治してや」とよく言われていました。相手に聞こえやすいように意識して話しているのと年齢を重ねてきたこともあって、声自体は低くなっ

てきたと感じているのですが声質は変わらないようです。

「君の声では社会で生きていけない」「もっとおなかから声を出して」と、先生に呼び出されたのが高校2年の時。なぜか発声指導を受けて教室に戻りました。うちを心配してのことだったのかもしれませんが、なかなか衝撃的な出来事でした。

そんな昔を思い出したのは、「学校の先生に何て言われたか、いまだに覚えてる」という彼との会話がきっかけです。周りから「努力が足りない、出来ない自分が悪い」と言われてきたこと。中学の進路相談で「厳しい環境に身を置かないと、社会で通用しない」と進路先を伝えられたこと。その時の状況や事情があったとは思うのですが、しんどい日々を過ごした彼が福祉とつながったのは

20代半ばの時でした。

30代に入った今は、就労系の福祉事業所を利用しています。一緒に働く周りの人に対して、「なんで自分出来ないのか分からん」「あんなん、一般社会に通用しいひんで」とイライラを募らせる彼。「障害のこと聞いてなかった」「支援学校があるなんて誰も教えてくれなかった」「そういう環境で育ってきてきてない」と、気持ち溢れます。

「あの時の大人がそう言ったんやで」「だって俺知らなかった」と繰り返す中で、「支援学校ってどんな?」「行ったことないから分からん」と尋ねられました。学校や福祉での支援について話をしていると、「なんかうまく言えへんけど」と言葉を探しながら一言。「早いとこ出会っとけばよかった」「ゆるしてくれら大人がいるっていいなあと思っ

た」彼が今、まんざらでもないと思えているかどうかは聞いていません。



中山 恵美子 (あらぐさ福祉会)

2+2=詩

「雪の日」

寒い寒い冬のある日。

空を覆うは一面の雪雲。暗くて冷たい雪の国。

そんなところからちらちらと、

降り落ちるものが、ひとつ、ふたつ。

腹こしらえもそこそこに、粉雪達が舞い落ちる。

一番乗りは誰にも譲らぬ。

急げや急げと我先に。

地上めがけて駆け下りる。

準備万端整えて、牡丹雪達が後を追う。

腹が減っては戦はできぬと、丸々大きく膨らんで。

どしりどしりと降りていく。

地上に着いた雪達は、遊び回って大はしゃぎ。

我が物顔で世界を埋める。

お日様が顔を出すまでは。

遊び疲れた雪達は、泥のように眠り込み、

煙のように去ってゆく。

次の遠足いつかしら。

お日様だけが知っている。



「眠る」

部屋の中にまで入ってくる寒気が、

まとわりついてしがついて、

体の中にまで染み込んできて、

気づけば僕は氷の塊に成り果てそうだ。

逃げなければ、逃げなければ。

ブルブル震えながら布団に潜りこんで、

ブルブル震えながら温まってくるのを待つ。

やがて温まった氷の体は溶け、いく。

気づけばウトウトとまぶたが落ち始め、

気づかないうちにスヤスヤと夢の中に。

ぬるま湯のように布団に染み込んだまま

ひと眠りひと眠り。

「白い景色」

薄明るい冬の午後、

部屋の中においても寒さは厳しい

染み込むような寒さを追い出すように、

はあと吐いた息は白く煙っていて、

あっとい間にとこかに消えていく

ふと目をやった窓の外でも、

寒さに震える街が盛大に吐息を漏らして

白く煙った街並みをやる気のない太陽が照らしていた



障害のある人の
権利を守る 北障連から

濱中博

21年度与謝野町

要望書 その①

【支援が必要な乳幼児・児童の
発達保障について】

一、緊急時に児童が利用できるショートステイなどの場を今あるサービスの中で町として連携、調整して下さい。
・町として家庭の状況を把握し、事業所や関係機関との連絡調整をして下さい。

二、障害の早期発見、早期療育につなげることに力を入れてください。中でも、乳幼児期に療育などの支援につながるに、二重の医療機関の受診を義務付けることなく、保健師判断で療育に繋ぐことができるようにして下さい。
・与謝野町から舞鶴療育センターへの受診は本人・保護者の負担が大きいです。

また、受診に至るまでには待機している時間も長く、その分不安も増大します。また療育などの支援開始の遅れに繋がっていくことが懸念されます。

最近では、年長児や小学校入学後「先生に勧められた」とこどがきっかけで療育につながる子どもが増えています。子どももの成長や発達を考えると、乳児期からの療育指導の積み重ねが大切だと考えています。

三、放課後や長期休業中に支援が必要な児童生徒が安心して過ごせる場を充実できるように支援して下さい。

・放課後等デイサービス以外にさまざまな利用できる場所があるのか、増えているのか知りたいので教えてください。

・利用者がサービスを希望に応じて利用できるよう事業所の数や体制を整えて下さい。

また、小学生が利用できる事業所も少ないと感じています。中高生については更に少ないので、今後のことを考えると不安が大きいです。事業所のスタッフ不足、利用者的人数

制限によりさらに利用できなくなることも考えられます。また、知的重度障害児となると受け入れてもらいにくいのではと感じています。親も仕事があり、仕事に大きく影響 が出ています。次号では「要望書の後半 ②」について掲載します。

療育教室

「わんぱくクラブ」

無認可の「宮津・与謝障害児 療育教室」だったのを与謝野町の支援や財政的な援助もあり、国の制度に則り就学前の療育事業所としてスタートしました。現在は、中高生の放課後等デイサービス事業「ふれんず」や、18歳までの子どもを対象とした相談支援事業「ぶんぶん」を立ち上げガンバっています。

福祉の町…与謝野町

与謝野町は、特別支援学校「与謝の海支援学校」を抱えています。

約50年前、与謝野町内に「与謝の海養護学校」が設立された時から、近隣の小・中学校との交流が始まり、一歩近い府立加悦谷高校との学校祭での交流も始まり全国的には非常に先進的な取組が続いています。その卒業生は親子二代にわたって交流会を経験しており、「福祉の町」と言われる所以です。

北障連は再開時から要望書を出し続けており、懇談や文書での回答の場を持つて下さり、京都北部福祉圏域の牽引役となっています。

知っ得情報

自動消火器の給付

代表委員 松本 美津男

東日本大震災から11年となりました。

地震で気をつけなければならぬ事の1つは火災です。

この火災を防ぐための物として火災警報器や自動消火器があります
が、今回は、京都市の自動消火器の給付について簡単に紹介します。

〈性能・価格〉

室内温度の異常上昇又は炎の接触で自動的に消火液を噴射し初期火災
を消火するもの。

28700円

〈対象者〉

身体障害者手帳2級以上の人、療育手帳Aなど児童相談所または知的
障害者更生相談所において知的障害と判定され障害の程度が重度若しくは
最重度である人、精神障害者保健福祉手帳1級の人又は難病等により
それぞれ火災発生の感知及び避難が著しく困難な障害者のみの世帯及び
これに準ずる世帯

〈自己負担〉

1割負担。ただし、所得制限あり。生活保護、住民税非課税の場合は
無料。

〈問合せ・申請先〉

区役所・支所保健福祉センター健康福祉部障害保健福祉課



あなたもぜひ 仲間に

サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ(資格不要)募集中
介護職員(資格要)募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に

京都市北区紫野東野町1-5
電話075-432-3636

命の平等をかけた、
無差別平等の医療と
福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介ください



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: info@kyoto-min-iren.org

2020年からのコロナ禍に学んだこと

大西里江（京障連代表委員）

今の障害のある学齢期の子どもの支援は、放課後デイサービスがあり、ショートステイも簡単に利用出来るようになってきました。共働きの親には、必要なサービスです。娘が学齢期の時は、共働きの親は、障がいのある子どもを両親やきょうだいなどのフォローがないと、特にお母さんがフルタイムで働くことは、なかなか出来ないことでした。結果、多くの親のどちらが、子どもの介護に従事することになっていました。

冠婚葬祭で子どもを預けないといけない時も、児童福祉センターに申請してからしか、ショートステイも利用が出来ません。緊急対応に困った親の話を聞くたびに、せめて、緊急事は、何とか預かってもらえないものかと、福祉事務所のケースワーカーや児童相談所の方と話していました。

その後、障害者総合支援法になり、多くのサービスが契約さえ出来たら、形式的にはすぐに利用出来るようになりました。利用制限もなく、多くのサービスを受けられることは、サービスを受ける側としては、有難いことと思います。しかし、時間で区切られるサービスで、本当に人としての支援としてふさわしいのか？相手は人なのに、希薄な支援にならないかと不安に感じる場合があります。

過去の支援は、基本的にまず家族、つまり親が介護できるかから始まり、その上で、家族支援では難しいと判断されたら、支援の手が入りました。今は、まず、今あるサービスの中で自分の子どもに利用出来る支援サービスを選ぶことが出来ます。誰でも平等に利用出来るようになったように見えますが、実態は違うのです。

たくさんのサービスを受けていた子どもが、コロナ禍で、休校や学年、学級閉鎖となり、自宅で過ごす時間が増えて困ったという親の話を聞くと、確かに、支援をたくさん受けていた状況では、親の負担は相当なものになると理解が出来ます。今のような放課後等デイサービスがなかった時代の親の話は、年齢による介護の大変さはあるけれど、子どもが自宅にいることはそれほど大変ではないといわれます。学童期の長い夏休みなど、家族だけで子どもを見ていたので、家族がまずは看るということが、当たり前とと思っていた時代ですから。子ども時代に、少ない支援しかなかった世代の親と、たくさんの支援がある世代の親との違いが、このコロナ禍で、はっきり分かれたのではないのでしょうか。

家族主体の支援では、親が高齢になった時、支援に慣れてないと、子どもは親亡き後、途方に暮れてしまいます。家族以外の支援に慣れておくことが必要です。どんなに重い障がいがあっても、協調性と社会性は子どもには、身に付けてほしいと思っています。私が居なくなっても、ちゃんと生きていける術を身につけて貰うことは、親としての務めと思っています。だからと言って、多くのサービスを受けて、人と沢山接したらいいではないとおもいます。親との関わりが基本的にあった上で提供される支援サービスと思うのです。

最初から人に任すのではなくて、特に幼児や学齢期は、このサービスを受けることが子どものためか？支援サービスは、当事者の支援サービスであるべきで、親のための支援サービスにならないようにしたいものです。時間重視の支援より、人重視の支援を受けてほしいと思うのです。